

「情報付与の前置き」について

小 沼 喜 好

1. はじめに

「前置き」と聞くと、どのような印象を持つであろうか。「前」に「置くもの／置かれたもの」ということから、次に重要なもの、本当に言いたいことなどが来ると捉えられ、「前置き」そのものはあまり重要ではないと理解するのではないだろうか。それゆえ、「前置き」が長いと重要な情報を含まない内容をわざわざクドクドと述べているという印象を与えてしまうので、「前置きが長い」という言い方は、批判するとき用いられるのであろう。「前置きが無くて分かりやすい」とは褒めるが、「前置きが長くて分かりやすい」とは決して褒めないであろう。

「前置き」を、情報を与えるという観点から見ると役に立たない「前置き」もあるが、機能、働きという観点から見ると、すべてが必ず何らかの機能を果たしていて、決して無駄で余分な「前置き」は存在しない（小沼2007）。

次の「前置き」は、内容がない形式的なものではなく、情報を持ったものである。

(1) 質問 ①ダイエットをしても長続きしません。②脂肪吸引を受けたいのですが、副作用など体に影響はないのでしょうか。

返答 ③超音波というものをご存知でしょうか。④お腹の中や赤ちゃんの様子を見たりと、病院の検査などでよく使われていますね。⑤勿論、身体に影響はまったくありません。⑥この超音波を活用した最新の脂肪吸引法は、さらに身体に与える負担が少なく、その為腫れも従来の半分程度で済みます。⑦脂肪吸引は、余分な脂肪を細胞ごと取ってしまうのでリバウンドがありません。⑧お腹やお尻などの気になる部分だけをスッキリと仕上げる理想的な痩身法です。⑨吸引出来るのは、皮下脂肪という指でつかめる脂肪です。⑩この時、皮膚のツヤや張り・なめらかさ保つため、皮膚のすぐ下の脂肪層だけはわざと残します。⑪何か所か組み合わせてやることも可能です。⑫入院の必要もなく、午前中の手術なら夕方にはお帰りになれます。

(『常陽ウィークリー』1998. 12. 18) (文番号, 下線は小沼)

質問「②脂肪吸引を受けたいのですが、副作用など体に影響はないのでしょうか。」は、応答詞「はい／いいえ」で返答できる質問文であり、日本語の教科書の例文では、質問に続いてすぐに応答詞「はい／いいえ」が出現する。しかし、例(1)ではそのようにはなっていない。

質問の主眼点は、文②中の「副作用など体に影響はないのでしょうか。」である。この質問に対し、返答の初めには「③超音波というものをご存知でしょうか。」と質問文が出現していて、②の質問に対する答えが出現しない。

返答の初めの下線部は、質問の中心的な話題「副作用などの影響」とかけ離れた話題「超音波」を「③超音波というものをご存知でしょうか。」と質問文の形式で提出し、②の質問への答えは、後に続く⑥⑦⑧に出現する。

では、答えが含まれるこの⑥⑦⑧に先行する下線部③④⑤はどのようなものだと捉えたらいいのだろうか。なぜこのように質問と全く無関係な話題で返答が始まるのだろうか。質問者から見ると、ここには自分の質問との繋がり、結束性が見られないので、返答者に対し質問の意味を理解し、返答しているのだろうかと疑念を持つかもしれない。

しかし、我慢して読み進めると、⑥⑦⑧で「⑥この超音波を活用した最新の脂肪吸引法は、さらに身体に与える負担が少なく、その為腫れも従来の半分程度で済みます。⑦脂肪吸引は、余分な脂肪を細胞ごと取ってしまうのでリバウンドがありません。⑧お腹やお尻などの気になる部分だけをスッキリと仕上げる理想的な痩身法です。」と質問に対する答えが与えられていると分かる。

それでは、なぜ答えを質問に続いてすぐに言わずに下線部を述べたのであろうか。下線部では「超音波」を話題として導入し、それについて使用法、安全性等の説明をしている。その説明を前提にし、次の答えが与えられている。

この話題「超音波」は、返答をするために重要で不可欠な鍵語となっていて、その鍵語について「④お腹の中や赤ちゃんの様子を見たりと、病院の検査などでよく使われていますね。⑤勿論、身体に影響はまったくありません」と身近な使用例、その安全性に関して説明がなされる。この鍵語の説明を踏まえ、次に「この超音波」と「この」で前の説明内容を受け、「⑥この超音波を活用した最新の脂肪吸引法は、さらに身体に与える負担が少なく、その為腫れも従来の半分程度で済みます」と質問に対する答えとなる結論へ進んでいる。

質問者の「②脂肪吸引を受けたいのですが、副作用など体に影響はないのでしょうか。」という質問に対して、返答者は、はじめに質問者を納得、安心させる質、量の情報を与え、共通の情報の基盤を構築した上で答えを述べた方がいいと考え、その基盤構築のために不可欠な鍵語「超音波」を話題として持ちだし、質問者を納得、安心させる質、量の情報を与えるように鍵語「超音波」を詳しく説明している。こうすることで質問者と返答者が同じ情報を共有することができ、返答者は安心して返答を続けていくことができ、質問者も安心して返答をきくことができる。つまり初めに鍵語を話題として取り上げ説明する「前置き」を置くことで必要十分な情報を質問者に与え、共通の基盤を作り、その上でさらに説明をしているのである。

このように情報を与え、情報の共有を目的とした「前置き」を小沼(2003,2007)で「情報付与の前置き」と名付けたが、本稿では、この「前置き」が日本語のテキスト(話し言葉では「談話」、書き言葉では「文章」の両方を含むものとする)の中で重要な役割を果たしており、この「前置き」は日本語のテキストに不必要な単なる飾りではないと詳述する。

「前置き」は、『例解新国語辞典』(1992:1080)の定義、「本題や本論に入る前に述べることば」を援用し、「本題、本論、結論、答等の前に述べることば」と定義する。

「前置き」にはテキスト構造に関わる大きな「前置き」と局所的な小さな「前置き」があり、階層性も見られる(小沼2011)。また、「前置き」には、「情報付与の前置き」のほかに、話題、

主題、題目を持ち出す「提題の前置き」、注釈の前置き、相手との接触の際の緊張を緩和するための「緊張緩和の前置き」、儀礼の前置きなど様々なものが存在している（小沼2007）。

本題、本論、結論、答等の主眼点と「前置き」は、言語形式を手掛かりにして明確に分けられる場合もあるが、言語形式を手掛かりに明確に分けることができない場合もある。前者の場合には、「質問-返答」での「前置き」がある。質問と返答の主眼点の間が「前置き」とテキスト構造上認定できる。後者の場合には、主眼点と「前置き」は、意味を手掛かりにして分けなければならない。分析の手続きとしては、まず初めに主眼点を認定する。そうすることで機械的に「前置き」が認定でき、主眼点と「前置き」が分離できる。

2. 「前置き」の先行研究

2.1 先行研究概観

「前置き」は、本題や本論に入る前に述べることを指すにすぎないので、先行研究には、異なった立場からの接近法が存在する。

「前置き」に関する研究として、「前置き」そのものを対象にした研究、談話分析での「前置き」、各研究者が言うところのメタ言語表現研究の領域での「前置き」研究、モダリティからの研究、接続助詞「が」（「けれども」は「が」に含める）の研究が挙げられる。

談話分析では、ある種の談話を研究する際に「前置き」の存在の有無と、どのような働きをしているのかの考察が重要になる。メタ言語研究は、「前置き」を目的とした研究ではないが、メタ言語表現の一部が「前置き」として用いられるので、結果として「前置き」の研究とみなせるのである。また、あるモダリティ表現が従属節として主節の前に置かれた場合に、その表現は「前置き」として働くので、「前置き」の研究と見なせるのである。接続助詞「が」の研究は、「が」で終わる節を用いて「前置き」を表すことができるので、「前置き」の研究に含まれるのである。いずれにせよ本稿で考察する「情報付与の前置き」は考察対象とはなっていない。

順番が前後するが、談話分析、メタ言語表現研究、モダリティからの研究、接続助詞「が」の研究、「前置き」そのものの研究の順で「前置き」の研究を考察する。

2.2 談話分析での「前置き」

柏崎（1993）は、話しかけ行動を談話のひとまとめで捉え、話しかけから依頼・要求などの用件内容表現まで録音収集した資料を分析対象にしている。「前置き」を、話し始めから用件内容を述べる前まで、つまり、用件内容に先立つ部分と定義している。

柏崎は筆者と異なり、「ちょっと」「あっ」まで「前置き」に含めている。また、談話の用件内容の前に見られる部分を「前置き」としているのだから、筆者と異なり、用件内容の中には「前置き」が出現するとは考えていないし、情報を付与する「前置き」は考察対象外である。

三井（1997）は、依頼の電話会話を分析資料としている。依頼の際に生ずる被依頼者の心理的な負担の軽減と、摩擦の回避を図るための依頼先行発話として、

A.前置き:「ちょっとお願いがあるんですけど」等の、依頼をすることを明らかにする、

メタ言語的な発話

B.情報要求：被依頼者が、依頼遂行できる状況にあるかどうかをあらかじめ尋ねる発話

C.事情説明：依頼の理由・必然性等を述べる発話

の三つが用いられていると述べている。筆者の「前置き」の立場からするとA, B, Cともに「前置き」と捉えられるが、「情報付与の前置き」ではない。

2.3 メタ言語表現, メタ言語行動に関する研究について

杉戸 (1983) は、ハイムズ (Hymes 1972) を援用し、言語行動を「言語行動の主体」, 「物理的場面」等の12の要素に分け、この要素に言及の焦点をあわせた言語行動であるメタ言語行動を注釈と呼んでいる。そして、この注釈は、同時に話し手と話し相手との関係に配慮をする言語行動なので待遇表現と考えている。これらの要素は、次に来る主節で示される言語行動を注釈するメタ言語行動であり、主節に対する「前置き」となっている。

杉戸の分析対象は、すべて文 (節) の大きさでの「前置き」であり、情報、知識を付与する「前置き」ではなく、主節で示される言語行動に対する注釈としての「前置き」である。

西條 (1999) は、談話の中における西條の言う「メタ言語」の役割を考察し、その機能を「①話題の提示」, 「②焦点化」等大きく七つ、さらに五つの下位分類、合計12に分類している (pp. 21-22)。そして談話を結束性あるものにする事で談話の構造化に役立つと述べている (p. 116)。

西條の分析対象の言語表現はすべてが発話の初めに来るというわけではなく、「…というような体験が、非常に大事なんじゃないかと思うのです。」 (p. 22) のように最後に発話を締めくくるときにも用いられるものもある。したがって、本稿の考察立場からすると、西條のメタ言語のある種のものが「前置き」となるが、「情報付与の前置き」は考察対象にはなっていない。

2.4 モダリティからの研究

中右 (1994) を説明する。モダリティは、「発話時点における話し手の心的態度」 (p. 42) と定義され、命題内容を限定するSモダリティと、伝達様式を限定するDモダリティに分けられる (p. 53)。このうち、後者に属するDモダリティは、「話し手自身の発話行為を限定し、発話内容や発話様式について前置き・但し書きなど、なんらかの留保条件を言い添える働きをする」 (p. 60)。例として、「率直に言って」, 「内緒の話だが」等が挙げられている。このモダリティは、主節の前に置かれるので、「前置き」となり、考察の一部が「前置き」の考察と重なると言える。文 (節), 句レベルが対象なので、「情報付与の前置き」とは関係ない。

2.5 接続助詞「が」の研究

小出 (1984) を考察する。小出は、接続助詞「が」全体を分析対象にし、機能を1～4に分けている (p. 31)。

1. 談話主題の提示
2. a. 補足説明の提示 b. 前置き
3. 発話行動への注釈
4. 二つの対比的事柄の提示

小出の分類であるが、1「談話主題の提示」は、主題の提示であるので、提題の「前置き」となる。2a「補足説明の提示」は、本稿の定義では「前置き」であり、本稿の「情報付与の前置き」と似ているが、「補足説明の提示」は、文（節）でなされるが、「情報付与の前置き」は、文がいくつか集まったテキストでなされているという点で異なっている。また情報を聞き手に与え、情報の共通の地盤を作るという働きはない。

2b「前置き」以外はすべて働きを示す名称によって分類がなされているが、「前置き」は、働きによる名称ではない。また、小出は、「前置き」の定義をしていない。したがって、小出の「前置き」は、本稿での「前置き」には含まれるが、「情報付与の前置き」ではない。

小出の3「発話行動の注釈」は、上述した杉戸（1983）の注釈と完全に重なる働きである。また、小出は、注釈がなされる理由の一つとして、相手への配慮を挙げているが、これも杉戸が注釈を待遇と捉えていることと重なるので、これも「前置き」になる。2、3は一緒にし、「前置き」と捉えられる。

4は、小出も説明している通り、どの分類項目へ入れるべきか、それとも新しい分類項目を作るべきかという曖昧な例であり、「前置き」の考察から除外される。

次に亀田（1998）と高橋（1999）であるが、分析対象を「が」節の提題用法に絞って考察している。したがって、両者の「が」節の用法は、「前置き」に含まれる。しかし、文レベルの考察であり、本稿の「情報付与の前置き」とは関係ない。

2.6 「前置き」からの研究

次に「前置き」が主目的の研究を説明するが、大塚（1999）、山下（2000）、Yotsukura（2003）、金田一（1977）の順に説明する。

大塚（1999）は、前置き表現を「本題に入る前に現われ、コミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジーとして使用される表現」（p. 119）と定義し、ポライトネスの観点からテレビ討論における前置き表現の働きを考察している。

テレビ討論の参加者は、これらの前置き表現を用いて相手に気を配り（ポライトネス）ながら発話を行っていることを報告している。また、これらの表現は、上記で説明した中右（1994）のDモダリティになるとも述べている（p. 119）。そうすると大塚の前置き表現は、上で説明した中右（1994）を「前置き」の観点から分析したものと捉えることができる。

山下（2000）はアジアからの留学生に日本語で書いてもらった意見文を分析対象にし、前置き表現が見られると報告している。ただし、前置き表現の出現は、母語の影響なのか、日本語を学習した結果なのかについては何も述べていない。

山下（2000：117）の前置き表現の定義は、

主に意見記述部の直前に位置し、意見提示が円滑に行われるために機能する表現を前置き表現と呼ぶ。前置き表現の範囲を広くとれば、書き手の主張内容と密接に関わりがある理由や根拠なども含まれる。しかし、ここでは、主張内容に直接関連がない

前置きで、意見導入のために置かれる読者への対人的な敬意表現を扱うことになる。たとえば、様々な立場の読み手に遠慮や配慮を示したり、彼らが意見を受け入れやすくするための素地を作ったり、読み手の理解を助ける気遣いを表したりする表現をさす。

となっている。

山下は、対人関係をスムーズにさせる気配り、配慮をするために用いられる言語表現を前置き表現と考え、分析していると捉えることができる。山下は、対人的な敬意表現に分析対象を絞っているのだから、本稿の「情報付与の前置き」は分析対象に含まれない。

Yotsukura (2003) は、ビジネスの電話の会話を分析対象にし、「前置き」(introductory statements) が話題を開始する (topic initiation) 手段として用いられる場合を考察している。

Yotsukuraの研究は、実際のビジネスの現場でどのような日本語の「前置き」が用いられているかを明瞭にするとともに、ビジネスの日本語の教育という観点から見ても大変重要な研究である。このような「前置き」を用いずにビジネスを日本語で行った場合には、必ず誤解や、摩擦が生じると容易に想像できる。

ここでの「前置き」は、電話での会話の開始部に現れ、話題を導入する「前置き」であり、また、「前置き」の大きさは、文(節)であり、「情報付与の前置き」とは関係ない。

次に金田一(1977)を説明する。金田一は、「前置き」に関しては他の研究と比べて一番広範で、体系的な考察を行っている。「前置き」を「本論の前の置かれる“そえもの”」(p. 153)と定義し、用いられる話題は、話の中心となる話題である主題と何の関係もない、時候の挨拶、ちょっとした世間話などの副題となると述べている。

金田一(pp. 154-158)は、「前置き」の効果は、〔一〕聞き手の気持をときほぐすことと〔二〕聞き手の理解の便をはかることの二つがあると述べている。〔一〕は《相手の感情を変化させ》、〔二〕は《相手に知識を与える》ことに重きがあると述べている。

〔一〕聞き手の気持をときほぐすためには、話し手と自分は共通の知識・関心、意見・感情をもっていると感じさせるのがよく、そのために、聞き手にとって既知のことがらが持ち出されるのが適当だと述べている。例えば、和歌山県出身の取引相手と商談する際に、「このあいだ田辺まで行きましたが、さすがにミカンの本場ですな。海岸ぞいの山のミカン畠、じつに見事だと思いました」といった「前置き」の例が挙げられている。

また、自己紹介は、話し手、聞き手の距離をうめるのに役立つので、「前置き」になると述べている。このように自己紹介まで「前置き」として考察することは、他の研究と大きく異なっている。

〔二〕聞き手の理解の便をはかるためには、聞き手の気持が解きほぐされる、話し手自身についての語りでなされる。その他に、主題(あるいは演題)の意味をわからせるように、かみくだいて説明したり、そういう問題について話すことの意味を納得させるような「前置き」があってもよいと述べている。また、これから先の本論の構成や進めかたについて、アウトラインを紹介する方法や、「はじめに、この時間にお伝えする主な項目を申し上げます」といったラジオのニュースでの方法があると述べている。

金田一は、「前置き」を対人関係の観点から話し言葉の流れの中で考察しており、二つ

の点で大きな特徴がある。一つは、挨拶等の形式的、儀礼的で重要な情報を伝えない所謂交話的な(phatic)「前置き」だけでなく、情報を持つ「前置き」も考察対象にしているという点である。

もう一つは、「前置き」の長さは、上記の和歌山県出身の取引相手と商談する際の「前置き」が示すように、文レベルだけでなく、文が数個集まったテキストも考察対象としているということである。

金田一の分類の「〔一〕聞き手の気持をときほぐす」は、形式的、儀礼的で重要な情報は伝達しない「前置き」に相当する。「〔二〕聞き手の理解の便をはかる」は、「主題（あるいは演題）の意味をわからせるように、かみくだいて説明する。あるいは、そういう問題について話すことの意味を納得させる」（p. 158）という金田一の説明により、あらかじめ話の開始部で、主題について説明することを指すのであろう。主題は何なのか、なぜ重要なのか、なぜこの主題について話すのかと、主題そのものについて説明することを指すと捉えられる。この場合の話題は、主題と異なるので、副題となり、あくまで主題についての前触れ、まとめとしての「前置き」である。

しかし、この「前置き」の働きは、「情報付与の前置き」とは異なる。本稿の考察対象である「情報付与の前置き」は、次にくる本題、本論、結論、答等を相手に容易に分かってもらうために「前置き」という形である事項について詳しく説明し、知識、情報を相手（聞き手、読み手等）に与え、相手と共有する情報の基盤を作り、本題を理解しやすくする働きを持っているのである。金田一の言う「情報」は本題分かりやすくするために主題の意味をかみ砕いて説明したり、主題で説明される問題について話す意味を納得させる「前置き」であり、したがって、本稿の「情報付与の前置き」は、金田一の〔二〕と異なるものである。

以上が「前置き」の先行研究についての考察であるが、どのように「前置き」を定義するかによって考察対象、方法が異なっている。

3. 分析

この節では、この「前置き」は、日本語で自分の意見を述べる順番、テキスト構造で大きな役割を果たしていると「情報付与の前置き」の実例を挙げて説明する。ここで、もう一度確認するが、「情報付与の前置き」とは、情報の発信者（話し手、書き手、返答者）が情報の受け手である相手（聞き手、読み手、質問者）に、次に来る結論を容易に理解してもらうために発する「前置き」であり、質と量の両面でこれだけの知識、情報があれば、情報の受け手である相手（聞き手、読み手、質問者）は納得し、次に来る結論を容易に理解してくれと考えて用いる「前置き」である。共通する情報、知識の基盤を作り、その基盤の上で両者が理解、判断を行うのである。

次に実例を分析するが、はじめに「前置き」の箇所が分かりやすい「質問・返答」構造を持つ例を挙げる。

(2) 質問 ①動物にもホクロはあるの？

返答 ②ホクロって、細胞の中の色素が何かの拍子にポッと出てきたものなんだ。③ メラニン色素っていうんだけど、これは人間も動物も持ってるんです。④だ

から、動物にも同じようにホクロができるんだよ。⑤動物は毛に被われているから、あまり見つけられないけれど、毛をかき分けたりするとみつけられるよ。

(『ベストカー』9/10:93)(文番号, 下線は小沼)

質問は「①動物にもホクロはあるの?」であり、「はい/いいえ」で答えられる質問である。それにもかかわらず、返答の初めに「はい/いいえ」、またはそれに類する答えが出現しない。答えは「④だから動物にも同じようにホクロができるんだよ」に出現する。この答えの前に②③「②ホクロって、細胞の中の色素が何かの拍子にポッと出てきたものなんだ。③メラニン色素っていうんだけど、これは人間も動物も持ってるんです。」が置かれている。これは、「①動物にもホクロはあるの?」の質問と「④だから、動物にも同じようにホクロができるんだよ。」の答えとの間にあるので、テキスト構造から見て「前置き」と認定できる。この「前置き」は質問中の鍵語の「ホクロ」を話題にし、詳しく説明している。こうすることで、質問者に答え④を納得してもらえるように十分な情報を与えている。そして、それを理由として、答えに至る。「④だから、動物にも同じようにホクロができるんだよ。」の初めにある「だから」により、②③「②ホクロって、細胞の中の色素が何かの拍子にポッと出てきたものなんだ。③メラニン色素っていうんだけど、これは人間も動物も持ってるんです。」の「前置き」は、質問者が納得するに足る十分な情報を与えるとともに、「理由提示」という働きを持たせて、そのあとに結論を提示している。

返答者は、自分の結論を導くのに必要な情報を質問者に与え、自分の返答が質問者にきちんと理解してもらえるような共通の基盤を作ってから答えを出そうとしたのであり、そのために長い「前置き」を置いたのであろう。したがって、この「前置き」は情報を与える「情報付与の前置き」と考えられる。

この返答には文の順番を変えた返答も考えられる。返答中の文の順番を変え、④②③⑤の順番にしてみる。④の初めの「だから」は取り除く。

(2-1) 質問 ①動物にもホクロはあるの?

返答 ④動物にも同じようにホクロができるんだよ。②ホクロって、細胞の中の色素が何かの拍子にポッと出てきたものなんだ。③メラニン色素っていうんだけど、これは人間も動物も持ってるんです。⑤動物は毛に被われているから、あまり見つけられないけれど、毛をかき分けたりするとみつけられるよ。

この順番でも「はい/いいえ」またはそれに類する答えは出現しないが、④の中の「ホクロができるんだよ。」で④が答えだとわかる。質問のすぐ後に答えが来るという日本語教科書でみられる「質問-返答」構造が出来上がる。このように質問の後にすぐ答えが来る方が教科書的であろう。

ここで大切なことは、文②③「②ホクロって、細胞の中の色素が何かの拍子にポッと出てきたものなんだ。③メラニン色素っていうんだけど、これは人間も動物も持ってるんです。」は、(2)では結論の前にあるので、「前置き」と捉えられるが、(2-1)では結論の次に来るので、「前置き」とはならないことである。文が占めるテキストでの位置が「前置き」の認定には重要な要素となる。

次の例も「質問-返答」の例である。

(3) 質問 ①F1のようにウイングをつけたら速く走れますか?

- 返答 ②F1のウイングは、ご存じのように空気の力で車体を路面に押しつける役割があります。③車体を路面に押し付けることで、エンジンのパワーを滑らずしっかり伝え、コーナリング速度を上げることができるんです。
- ④ウイングによる空気の力を「ダウンフォース」といいますが、これはだいたい80km/hくらいから効き始めます。⑤そうすると普通のクルマにも使えそうですが、F1と普通のクルマには、大きく違う点があるんです。
- ⑥それはエンジンパワーとタイヤの性能。普通のクルマはパワーがあってもF1の1/5程度。⑦それにタイヤもF1ほど路面を掴めません。⑧つまりウイングで車体を押し付ける力に、パワーが負けてしまうんです。⑨タイヤも、いくら押し付けても路面を掴みきれません。
- ⑩ですからウイングを付けたらかえって抵抗になって、遅くなってしまいかもしれませんね。

(『ベストカー』9/10:93-94) (文番号, 下線は小沼)

質問①は応答詞「はい/いいえ」で返答できる質問である。この例でも「はい/いいえ」が出現せず、答えは、「⑩ですからウイングを付けたらかえって抵抗になって、遅くなってしまいかもしれませんね。」にある。質問「①F1のようにウイングをつけたら速く走れますか？」とその答え「⑩ですからウイングを付けたらかえって抵抗になって、遅くなってしまいかもしれませんね。」との間に、②-⑨が来ている。

では、この②-⑨はなんなのか。②-⑨は質問中の鍵語「ウイング」を話題にして説明している。返答の①の主眼点は「ウイングをつけたら速く走れますか？」である。そこで、ウイングとはどのようなものなのかを②-⑨で詳しく説明している。これによりこの例(3)を読む者は、それまでウイングが何かわからなくとも、この説明で理解し、納得する。その答えの理解に十分な情報を獲得したという条件を踏まえ、「⑩ですからウイングを付けたらかえって抵抗になって、遅くなってしまいかもしれませんね。」という結論に至っている。

この例でも、⑩の初めに「ですから」という理由を表す接続詞が見られるので、②-⑨は理由となっていると考えられる。①で質問を提出し、⑩で答えが述べられているので、②-⑨はその位置から「前置き」だと認定される。これは答えを述べるのに必要な情報を与える「情報付与の前置き」である。これは単に「前置き」で情報を与えているにすぎないが、⑩の初めの「ですから」により理由として引き継がれていることが分かる。

次の例は「質問-返答」ではない例である。

- (4) ①地球は、自転している。②それも、わずかながら傾いているらしい。
- ③この傾きのため、太陽光線が垂直に照りつける地帯は、一年周期でわずかに変化するそうである。④春分の日正午には赤道付近に垂直に照りつける。⑤夏至のときは北回帰線の上に太陽がくる。⑥赤道をはさみ北回帰線と南回帰線の間の地域が熱帯だという。
- ⑦嘉義の南郊に、その北回帰線が通っていて、路傍に、大きな碑が立っている。
- ⑧われわれは高雄という熱帯からきて、嘉義南郊の碑の前に立った。⑨一歩北へゆけば、温帯になる。
- ⑩「この碑をみると、台湾に来たなという気分になりますね」と、北海道生まれの編

集部の村井重俊氏がつぶやいた。

〔台湾紀行 街道をゆく40〕：261（文番号、下線は小沼）
これは、「嘉義で思ったこと」という題名の章の冒頭部である。章の題名から分かるように、中心的な話題は台湾の都市「嘉義」である。しかし下線部の①-⑥は、嘉儀とは無関係な話題である。

①-⑥の「①地球は、自転している。②それも、わずかながら傾いているらしい。③この傾きのため、太陽光線が垂直に照りつける地帯は、一年周期でわずかに変化するそうである。④春分の日正午には赤道付近に垂直に照りつける。⑤夏至のときは北回帰線の上に太陽がくる。⑥赤道をはさみ北回帰線と南回帰線の間の地域が熱帯だという。」は嘉儀とは何の関係もない地理に関する話題の話が続いている。

しかし、次の⑦「嘉義の南郊に」で始まる文で文の流れが変わる。「⑦嘉義の南郊に、その北回帰線が通っていて、路傍に、大きな碑が立っている」から（4）の主眼点へ入っていく。文⑦中の「その北回帰線」という言い方により、先行する下線部中にある「北回帰線」、さらには下線部すべてと結び付き、それまでの情報がすべて「その」に流れ込んでいる。「嘉義」が含まれる「⑦嘉義の南郊に、その北回帰線が通っていて、路傍に、大きな碑が立っている。」という発話と①-⑥の下線部がつながり、結束性が生まれる。

この例では、「質問-返答」構造ではなく、「章題-返答」により、返答の前に来る箇所が「前置き」だと認定できる。

下線部①-⑥は、「北回帰線」を詳しく説明し、聞き手、読み手に「北回帰線」についての質と量の両面で十分な情報を与え、次に来る内容を分かりやすくする働きを持っている。主眼点の⑦-⑩に含まれる鍵語は「北回帰線」であり、この鍵語をあらかじめ①-⑥で説明するために、章題「嘉義で思ったこと」から外れた話題で①-⑥が語られている。

話題別に文をまとめてみる。

話題Ⅰ：嘉義

「章題：嘉義で思ったこと」

話題Ⅱ：地理に関する話題、北回帰線

- ①地球は、自転している。
- ②それも、わずかながら傾いているらしい。
- ③この傾きのため、太陽光線が垂直に照りつける地帯は、一年周期でわずかに変化するそうである。
- ④春分の日正午には赤道付近に垂直に照りつける。
- ⑤夏至のときは北回帰線の上に太陽がくる。
- ⑥赤道をはさみ北回帰線と南回帰線の間の地域が熱帯だという。

⑦嘉義の南郊に、その北回帰線が通っていて、路傍に、大きな碑が立っている。

⑧われわれは高雄という熱帯からきて、嘉義南郊の碑の前に立った。

- ⑨一歩北へゆけば、温帯になる。
 ⑩「この碑をみると、台湾に来たなという気分になりますね」と、北海道生まれの編集部の村井重俊氏がつぶやいた。

章題と⑦は繋がるが、①-⑥とは繋がらない。つまり、章題と⑦の間に一見無関係な話題の話が入り込み、話の筋がそれていて、「嘉義で思ったこと」と①-⑥の話題には結束性が見られない。章題と関連する⑦に①-⑥で与えられた情報がすべて流れ込んでいる。①-⑥は章題と⑦の間に入り、⑦-⑩を述べるに必要な「前置き」だと考えられる。そして、⑦-⑩の内容に関連する鍵語である「北回歸線」に関連する情報を与えているのであり、「情報付与の前置き」ととらえられる。決して無駄で、不必要なものでもない。

次の例を見よう。この例も「質問-返答」構造ではない。

- (5) 吉村①焼酎もうまくなりましたよね。
 城山②ほんとうにうまくなった。
 ③宮崎に「百年の孤独」なんて焼酎あるでしょう。
 吉村④大河内昭爾君っているでしょう。
 ⑤彼がうちのすぐそばに住んでいます。
 ⑥宮崎県生まれで、酒が一滴も飲めない。
 ⑦それなのに、宮崎の人が焼酎をどんどん送ってくるんだ。
 ⑧あの人に送ってもなんの意味もない(笑)。
 ⑨たちまち僕のところを持ち込まれるわけ。
 ⑩だから「百年の孤独」もよく飲みます。

(『対談集「気骨」について』：210-211) (文番号、下線は小沼)

(5) 全体の話題は「焼酎，百年の孤独」である。吉村の発話①に対して城山は②で、吉村の使った表現「うまくなる」を繰り返すことで吉村①に反応していると示し、さらに③で「宮崎に『百年の孤独』なんて焼酎あるでしょう。」と「焼酎，『百年の孤独』」を含む表現を使うことで、「焼酎」が含まれた吉村①に反応していることを見せる。

また、③では「でしょう」を使うことで吉村の同意、確認を求めているが、吉村は④で、城山③の同意、確認の要求に全く反応せず、「焼酎，百年の孤独」と無関係な新しい話題「大河内昭爾君」を提示し、この話題に関して話を始める。⑤は住所に関して述べている。⑥には酒という焼酎の上位概念の語が出現しているが、城山の②③とはまだ繋がらない。⑦では、その酒の低位概念で具体的な焼酎という語が出現する。ここで全体の話題と関連する「焼酎」が出現するが、城山の②③とはまだ繋がらない。

⑧ではその焼酎と「大河内昭爾君」との関連が述べられ、⑨では⑥の「大河内昭爾君は酒が一滴も飲めない」との関連で自分のところへ焼酎が持ち込まれると述べられる。そして⑩で「百年の孤独」を飲むという事柄が述べられる。ここではじめて、城山の③と「百年の孤独」とが繋がる。

この④-⑨が根拠となり、⑩の「だから」に繋がり、「百年の孤独」が出現する。ここにいたって初めてなぜ吉村は城山の③「宮崎に『百年の孤独』なんて焼酎あるでしょう。」

を無視するかのように全く新しい話題の「④大河内昭爾君っているでしょう。」を発話したかが明瞭となる。結果から見ると、吉村は城山の発話を無視したのではなくきちんと反応していると分かる。

吉村の④-⑩では主眼点は⑩である。それが城山の「③宮崎に『百年の孤独』なんて焼酎あるでしょう。」に反応していることを示すことになる。「⑩だから『百年の孤独』もよく飲みます。」に至るまでにどのような順番で自分の意見を述べていくかを考えた結果、④-⑩の順番となったのである。

①-⑩を話題Ⅰ（焼酎，百年の孤独），Ⅱ（大河内昭爾君）別に表記する。

話題Ⅰ（焼酎，百年の孤独）

話題Ⅱ（大河内昭爾君）

吉村①焼酎もうまくなりましたよね。

城山②ほんとうにうまくなった。

③宮崎に「百年の孤独」なんて
焼酎あるでしょう。

吉村④大河内昭爾君っているでしょう。

⑤彼がうちのすぐそばに住んでいます。

⑥宮崎県生まれで、酒が一滴も飲めない。

⑦それなのに、宮崎の人が焼酎をどんどん送ってくるんだ。

⑧あの人に送ってもなんの意味もない（笑）。

⑨たちまち僕のところに持ち込まれるわけ。

結論：吉村⑩だから「百年の孤独」もよく飲む

吉村の発話は話題の観点から分類すると二つ、Ⅰ、Ⅱに分けられる。Ⅰが全体の話題である「焼酎，百年の孤独」と関連している。この話題Ⅰを中心にして、吉村の発話全体が組み立てられている。⑦には「焼酎」が出現するが、これは話題ではなく、話題について述べた題述内容に含まれているに過ぎない。⑩が本題（本論，結論）だと捉えると、④-⑨は「前置き」となる。

城山の③「宮崎に『百年の孤独』なんて焼酎あるでしょう。」という同意を求める表現に対して、吉村は、どのように反応したらいいのかと考え、城山の焼酎「百年の孤独」から連想した④-⑨を述べ、「焼酎」と結び付け、⑩で「だから」つまり「そのような理由だから」を用い、「『百年の孤独』もよく飲む」と述べている。ここで、城山の③と結び付く。「焼酎，百年の孤独」を鍵語と捉え、これに関して説明し、その説明を踏まえ、城山の③の同意を求める表現に⑩で返答している。

④から⑨は、⑩「『百年の孤独』もよく飲む」に対する「前置き」となり、この「前置き」は、「だから」が示す理由を具体的に詳しく述べている。つまり、結論を理解しやすくするために鍵語「焼酎，百年の孤独」をあらかじめ説明し、結論を納得させるに足る必要な情報を与える「情報付与の前置き」になる。相手に十分な情報を与えることで、その後の自分の話を相手にわかりやすくするという働きを発揮している。

以上、例を分析しながら、「情報付与の前置き」を説明した。

4. まとめ

本稿では「情報付与の前置き」について実例を用いて分析説明した。この「前置き」は、形式的でも儀礼的でもなく、実質的で情報を伝える働きを持っている。情報の送り手（話し手、書き手等）が情報の受け手（聞き手、読み手等）に納得させるだけの情報、知識を与え、情報の送り手（話し手、書き手等）と情報の受け手（聞き手、読み手等）が共通の情報、知識の基盤を作り、その基盤の上でお互いに納得して結論、本題、本論に至るといふ働きを持っているのである。この「前置き」は無用で、余分なものを付加するものでもなく、単なる飾りでもなく、日本語のテキスト構造上重要な働きをしているのであり、日本語テキストの中で頻繁にみられるものである。

この共通の基盤を作るという「情報付与の前置き」の働き、機能を知らないと、なぜ突然話題が変わり、本題から話の筋が変わり、全く異なる方向へ話が進んでいくのかと訝り、イライラし、あるいは腹を立て、早く結論を言えと急かすかもしれないし、途中で話についていくのをやめるかもしれない。日本語は最後まで我慢して聞か／読まなければならぬ言語であり、話題が変わったと思ってもそのまま待てば、元の話題に繋がって結束性が保たれるのである。

参考文献

- 大塚容子 (1999) 「テレビ討論における前置き表現—「ポライトネス」の観点から」
 (『岐阜聖徳学園大学紀要<教育学部 外国語学部>』第37集) pp.117-131
- 小沼喜好 (2001) 「ドイツ語の質問文について —特に決定疑問文の場合—」
 (『RHODUS Zeitschrift für Germanistik』第17号 筑波大学ドイツ文学会) pp.77-88
- 小沼喜好 (2003) 「日本語の「確認質問の単純質問」での返答について」(『Association of Teachers of Japanese Occasional Papers』No.5) pp.17-18
- 小沼喜好 (2004) 「日本語の返答の仕方について」(『外国語教育論集』第26号, 筑波大学外国語センター) pp.175-183 [採録] (2007) (『日本語学論説資料』第42号 第5分冊 (コミュニケーション) 論説資料保存会) pp.270-274
- 小沼喜好 (2005) 「日本語での話の進め方について」(『外国語教育論集』第27号, 筑波大学外国語センター) pp.141-150 [採録] (2007) (『日本語学論説資料』第42号 第5分冊 (コミュニケーション) 論説資料保存会) pp.275-280
- 小沼喜好 (2006) 「「が節」とその前置き用法について」(『外国語教育論集』第28号, 筑波大学外国語センター) pp.53-63 [採録] (2008) (『日本語学論説資料』第43号 第2分冊増刊 (文法) 論説資料保存会) pp.83-88
- 小沼喜好 (2007) 「日本語の前置きの働きと分類について」(『外国語教育論集』第29号, 筑波大学外国語センター) pp.127-137 [採録] (2009) (『日本語学論説資料』第44号 第4分冊 (文章・文体・音声・音韻・方言) 論説資料保存会) pp.72-77
- 小沼喜好 (2008) 「何を「前置き」とするのか」(『外国語教育論集』第30号 筑波大学外国語センター) pp.87-98 [採録] (2010) (『日本語学論説資料』第45号 第2分冊 (文法) 論説資料保存会) pp.318-323
- 小沼喜好 (2010) 「講義にみられる前置きについて」(『外国語教育論集』第32号 筑波大学外国語センター) pp.35-49 [採録] (2012) (『日本語学論説資料』第47号 第5分冊 (コミュニケーション・言語学・対照研究) 論説資料保存会) pp.260-267
- 小沼喜好 (2011) 「前置きの階層性について」『流通経済大学流通情報学部紀要』Vol.15. No.2. (通巻29) pp.27-40

- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析－依頼・要求表現の実際を中心に－」(『日本語教育』79号, 日本語教育学会) pp.53-63
- 亀田千里 (1998) 「接続助詞「が」の提題用法について」(『日本語と日本文学』26号, 筑波大学国語国文学会) pp.1-9
- 金田一春彦 (1956) 『話し言葉の技術』(光風出版) (復刊 (1977) 講談社学術文庫123 講談社)
- 小出慶一 (1984) 「接続助詞ガの機能について」(『紀要』7, アメリカ・カナダ十一大学連合日本研究センター) pp.30-44
- 西條美紀 (1999) 『談話におけるメタ言語の役割』(風間書房)
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半沢幹一 (編) (1997) 『文章・談話のしくみ』(おうふう)
- ザトラウスキー・ポリー (1993) 『日本語の談話の構造－勧誘のストラテジーの考察－』(くろしお出版)
- 杉戸清樹 (1983) 「待遇表現としての言語行動－「注釈」という視点－」(『日本語学』第2巻7号, 明治書院) pp.32-42
- 高橋美奈子 (1999) 「『判断詞+接続助詞「が」による主題提示を持つ文について』(『日本学報』18, 大阪大学文学部日文学研究室) pp.31-44
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』(大修館書店)
- 三井久美子 (1997) 「『依頼』のフレームの明示性について」(『日本語・日本文化研究』第七号, 大阪外国語大学日本語講座) pp.235-245
- 山下みゆき (2000) 「日本語学習者の意見文における前置き表現の使用の実際」(『日本語とアジア諸言語との作文対訳コーパス：対照言語学／日本語教育への応用』, 国立国語研究所) pp.117-121
- 『例解新国語辞典』第六版 (2003) (三省堂)
- Hymes, Dell (1972) Models of the interaction of language and social life. In: J. J. Gumperz/D. Hymes (ed.) Directions in sociolinguistics. New York. pp. 35-71.
- Yotsukura, Lindsay Amthor (2003) Topic initiation in Japanese business telephone conversation. In: McClure William (ed.) Japanese/Korean linguistics vol.12. CSLI, Stanford California. pp. 75-87.

用例出典

- 司馬遼太郎 (1997) 『台湾紀行 街道をゆく40』(朝日文芸文庫：261) 『常陽ウィークリー』1998.12.18
- 城山三郎 (2006) 『対談集「気骨」について』(新潮社)
- 『ベストカー』9/10 (2002) (三推社／講談社)

Information-giving *maeoki* prefaces

ONUMA, Kiyoshi

In this paper I explain and analyze in detail the function of information-giving *maeoki* prefaces in Japanese written/spoken texts. The concept of information-giving *maeoki* was first proposed by Onuma (2003, 2007). The word *maeoki* literally means ‘before-put’, that is put before the conclusion of a text or before the main point of a compound sentence.

There are many kinds of *maeoki*, including *maeoki* for politeness, *maeoki* for proposing themes, and *maeoki* which function to soften tension at a first meeting. While these kinds of *maeoki* tend to be expressed in a single sentence, information-giving *maeoki* tend to operate on the text level and have yet to be studied in detail. Senders (writers/speakers) use information-giving *maeoki* to give detailed and precise information about an important word or concept in the conclusion of the text. Information-giving *maeoki* also allow senders to build a common ground of knowledge with their receivers (readers/hearers) on which they can proceed to explain the main theme with confidence that their receivers will be able to understand their talk. Thus, information-giving *maeoki* are very important and indispensable in Japanese texts.